

2026年度第4回(9月)北辰テスト対策予想問題

国語(制限時間 50分・100点満点)

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(28点)

中学三年生の湊(みなと)は、夏休みの間、椅子職人である祖父の工房に通っている。夏休みの終わりが近づき、二学期の初めに提出する進路希望調査票を前に、湊は自分の思いを母にまだ伝えられずにいる。

工房の窓から差し込む夕方の光の中で、木くずが白く舞っていた。祖父は鉋(かんな)を長い木の板に当て、ためらいのない速さで手前に引く。しゅつ、と薄い音がして、向こうが透けるほど薄い鉋くずが一枚、床に落ちた。

「やってみるか」

祖父が場所を空けた。僕は鉋を握った。祖父のようにはいかない。刃が木に食い込んで、がりと鈍い音を立てる。①隣で見ていた祖父の手に目が留まり、僕は思わず黙り込んだ。節くれ立って、あちこちに古い傷の痕がある、大きな手だった。六十年、木を削り続けてきた手だ。かぼん中の進路希望調査票を、ふいに思い出した。第一志望の欄は、まだ空欄のままだった。

「湊。明日、椅子を届けに行く。ついてくるか」

祖父は僕の手元を見たまま言った。

次の日、軽トラックで隣町へ向かった。届け先は、古い一軒家だった。出てきたのは、腰の曲がった小柄なおばあさんだった。祖父が椅子を居間に置くと、おばあさんはゆっくり腰を下ろし、それから、ひじ掛けに手を突いてすつと立ち上がった。

「まあ。……立ち上がるとき、膝が痛くないよ」

おばあさんは、もう一度座っては立ち上がり、子どもみたいに笑った。聞けば、膝を悪くしてから、一度座ると立つのがおつくうで、だんだん座ることさえ減っていたのだという。祖父は、ひじ掛けの高さと座面の傾きを、おばあさんの体に合わせて何度も作り直したのだそうだ。

②帰りの軽トラックの中で、僕はさっきのおばあさんの笑顔を思い出して、胸の奥が熱くなるのを感じていた。椅子が、ただの椅子ではなくなる瞬間を、僕は初めて見たのだと思った。

「道具はな」

ハンドルを握ったまま、祖父がぼつりと言った。

「工房で出来上がるんじゃない。使う人の暮らしの中で、初めて完成する」

僕は窓の外を流れる田んぼを見ながら、その言葉を何度も頭の中で繰り返した。

家に帰ると、母が夕飯の支度をしていた。母は祖父の一人娘だが、工房は継がず、街の会社で働いている。「湊には、選べる道を広く持っていてほしい」。進路の話になると、母はそう言った。普通科の高校へ行って、それから考えればいい、と。母の言うことは、たぶん正しい。でも。僕は自分の部屋に上がり、机の上に進路希望調査票を広げた。しばらく座ったまま、窓の外の暗くなっていく空を見ていた。それから、鉛筆を握って、③第一志望の欄に工業高校の名前を書いた。インテリア科、と学科の名前も書いた。

階段を下りて、台所に立つ母の背中に調査票を差し出したとき、④心臓が大きく鳴っていたけれど、不思議と目はそらさずにいられた。

母は手を拭いて、調査票を受け取った。長い間、黙って見ていた。やがて顔を上げた母は、怒った顔でも、悲しい顔でもなかった。

「……湊の手、おじいちゃんの手に似てきたね」

母はそう言って、少しだけ笑った。それから、「おじいちゃんの椅子、お母さんの部屋にも一つあるんだよ。高校に受かったら、作り方、教えてもらいなさい」と言った。

その夜、僕は布団の中で、⑤自分の手のひらを天井にかざしてみた。鉋の柄が当たる場所に、小さくてかたい豆ができていた。まだ、祖父の手には遠い。それでも、この手はもう、行き先を知っている気がした。

(オリジナル創作)

(注) 鉋(かんな)……木材の表面を薄く削ってなめらかにする道具。進路希望調査票……進学を希望する高校などを書いて学校に提出する用紙。

問1 ①「隣で見ていた祖父の手に目が留まり、僕は思わず黙り込んだ」とありますが、このときの湊の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア祖父の手の古い傷痕を見て、職人の仕事の危険さを初めて知り、自分に同じ仕事が務まるのかと不安になっている。

イ鉋をうまく使えなかった自分が恥ずかしく、熟練した祖父の手を直視できずにいる。

ウ長い年月木を削り続けてきた祖父の手を前にして、自分の進路への思いが呼び起こされ、すくには言葉にできない思いを抱えている。

エ祖父が自分の進路の悩みを見抜いていると気づき、何と言われるのかと身構えている。

問2 ②「帰りの軽トラックの中で、僕はさっきのおばあさんの笑顔を思い出して、胸の奥が熱くなるのを感じていた」とありますが、このときの湊の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア祖父の椅子が高く評価され、職人の孫であることが誇らしくてたまらなくなっている。

イおばあさんの喜ぶ姿を通して、椅子が使う人の暮らしを変える力を持つことを実感し、心を動かされている。

ウ膝の悪いおばあさんの暮らしを思い、自分にも何か手助けができないかと考え込んでいる。

エ祖父の技術の高さをあらためて思い知り、自分では到底追いつけないと圧倒されている。

問3 ③「第一志望の欄に工業高校の名前を書いた」とありますが、湊がそのように決めたのは、どのような思いからですか。次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、暮らし、作りたいものの二つの言葉を使って、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

問4 ④「心臓が大きく鳴っていたけれど、不思議と目はそらさずにいられた」とありますが、このときの湊の様子を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア母に反対されても聞き流せばよいと開き直り、気持ちが軽くなっている。

イ祖父が味方になってくれるという安心感から、母への遠慮が消えている。

ウ調査票を書き上げた達成感に満たされ、母の反応を気にする余裕がなくなっている。

エ緊張しながらも、自分で選んだ道への思いが定まっているため、母と正面から向き合おうとしている。

問5 ⑤「自分の手のひらを天井にかざしてみた」とありますが、このときの湊の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア職人への道のりはまだ遠いと自覚しながらも、自分の進む道を自分で選び取ったことへの静かな決意と希望を感じている。

イ手にできた豆の痛みから、職人の仕事の厳しさを思い、進路への不安をつのらせている。

ウ祖父の手に少しでも近づいたことがうれしく、すぐにでも職人として働きたいと気持ちがはやっている。

エ自分の決断を受け入れてくれた母への感謝で胸がいっぱいになり、眠れずにいる。

問6 本文の内容や表現について述べた文として適切でないものを、次のア～オの中からすべて選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア「手」に関わる描写が繰り返し用いられ、祖父から湊へと受け継がれていくものや、湊の決意が象徴的に表現されている。

イ母が工房を継がなかったいきさつが回想場面で詳しく描かれ、母の複雑な思いが物語の中心に据えられている。

ウ「しゅつ」と薄い音がして」など、音や光の描写によって、工房の場面の雰囲気が伝わるように工夫されている。

エ祖父の言葉は短く飾りけがなく、その言い切りの中に、長年木に向き合ってきた職人としての生き方がにじんでいる。

オ物語は祖父の視点から語られており、孫の成長を見守る祖父の心情が直接描かれている。

2

問1 ① 次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)
優勝した選手の健闘を称える。(読み)

問1 ② (各2点) 話し合いが円滑に進む。(読み)

問1 ③ (各2点) 収穫した米を倉庫にチヨゾウする。(書き)

問1 ④ (各2点) 友人の頼みをココロヨク引き受ける。(書き)

問2 (1) 次の(1)・(2)の――部のかたかなを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとのア～エの中からそれぞれ一つ選び、その記号を答えなさい。(各2点)
専門家の意見をサンコウにする。

ア 家族で神社にサンパイする。

イ 提案にサンセイの意見を述べる。

ウ 一年間の決サンをまとめる。

エ 雄大なサンミヤクをながめる。

問2 (2) (各2点) 文化祭の劇のハイヤクが決まる。

ア 駅前のヤツキヨクで薬を買う。

イ 学級委員としてのヤクワリを果たす。

ウ 英語の文章を日本語にホンヤクする。

エ 友人とのヤクソクを守る。

問3 次の文章中の――部ア～カの中から、品詞が副詞であるものをすべて選び、その記号を答えなさい。(3点)

「休みの日の朝、ふと思いついて散歩に出かけた。大きな公園までの道をゆつくり歩いていくと、道ばたに小さな花がきれいな色で咲いていた。今度はもつと遠くまで歩いてみようと思う。」

――部 ア ふと／イ 大きな／ウ ゆつくり／エ 小さな／オ きれいな／カ もつと

問4 次のア～エの文の――部の二つの文節が、補助の関係になっているものを一つ選び、その記号を答えなさい。(3点)

ア 兄と 弟が 公園で遊ぶ。

イ 机の上に本が置いて ある。

ウ 白い 犬が こちらに走ってくる。

エ 鳥が 空を飛ぶ。

問5 次のア～エの文の中から、――部の慣用句の使い方が正しいものを一つ選び、その記号を答えなさい。(3点)

ア 彼女は顔が広いので、初対面の人と話すのがとても苦手だ。

イ テストの点数が悪くて、思わず腹を割って怒ってしまった。

ウ 今日は風が冷たいので、襟を正してマフラーをしつかり巻いた。

エ 買い物の帰りに油を売っていたら、家に着くのがすっかり遅くなった。

問6(1) M中学校の生徒会では、九月に地域の高齢者の方々を招いて行う「ふれあい交流会」について、生徒会役員のAさんたちが話し合っています。次の「話し合いの様子」を読んで、あとの(1)～(3)に答えなさい。

【話し合いの様子】

Aさん「今日は、ふれあい交流会で行う内容と、地域の皆さんにお送りする案内状について話し合います。まず、交流会の内容について意見はありますか。」

Bさん「はい。昔の遊びと一緒に楽しむのはどうでしょうか。お手玉やけん玉なら、地域の方が先生役になってくださるので、教わりながら自然に会話が生まれると思います。」

Cさん「Bさんの意見に賛成です。それに加えて、私たちの方から何かお返しができるといいと思います。例えば、合唱コンクールで歌った曲を披露すれば、教わるだけでなく、こちらからも楽しんでいたけるのではないのでしょうか。」

Dさん「いいですね。では、案内状の文面も考えましょう。結びの一文は『当日、皆様にお会いできることを楽しみにしております。どうぞお氣をつけてーⅠー』』』としてはどうでしょうか。」

Aさん「ありがとうございます。目上の方への言葉遣いとして適切かどうか、あとで先生にも確認しましょう。これまでの話し合いでは、交流会の内容として、BさんとCさんからーⅡーという二つの案が出ています。次に、当日の流れを考えましょう。」

話し合いが続く

(1) 話し合いの様子の空欄「Ⅰ」にあてはまる言葉として、目上の方への言葉遣いとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(3点)

ア 参ってください

イ 来てください

ウ お越しく下さい

エ お越しになられてください

問6(2) Cさんは、この話し合いでどのような工夫をしていますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(2点)

ア 前の人の意見の問題点を指摘して、自分の意見に置き換えている。

イ 前の人の意見に賛成の考えを示したうえで、それとは別の視点から新たな提案を付け加えている。

ウ これまでに出了意見の要点を整理して、参加者の合意形成を促している。

エ 前の人の発言について疑問点を質問し、発言の内容を確かめている。

問6(3) 話し合いの様子の空欄「Ⅱ」にあてはまる内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(2点)

ア 案内状の文面を先生に確認すること、当日の流れを決めること

イ お手玉とけん玉という、二種類の昔の遊びを行うこと

ウ 交流会を九月に行うことと、会場を体育館にすること

エ 地域の方から昔の遊びを教わるということ、こちらから合唱を披露すること

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(28点)

スマートフォン の地図アプリを使えば、初めての町でも迷わずに目的地に着くことができる。画面の矢印に従って歩けばよいのだから、これほど便利なものはない。私自身、知らない町での待ち合わせに、何度この小さな画面に助けられたかわからない。

けれども、あるとき気づいたことがある。アプリに案内されて着いた場所までの道のりを、私はほとんど覚えていないのだ。どんな店の前を通ったのか、どこで曲がったのか、思い出せない。画面の中の矢印は覚えているのに、①歩いたはずの道が、記憶の中に残っていない。たぶん、私は道を歩いていたのではなく、矢印をなぞっていただけなのだろう。自分の頭で道を選ぶことをしなかった道のりは、記憶に残らないのだ。

便利さとは、目的までの距離を最短にすることだと言いかえられる。迷うこと、遠回りすること、立ち止まって考えることは、目的に着くという点から見れば、すべて「むだ」である。技術はこのむだを次々に取り除いてきた。調べたいことは検索すれば数秒でわかるし、外国語の文章は自動翻訳にかければすぐに読める。

しかし、ここで少し立ち止まって考えてみたい。私たちは便利さと引きかえに、何かを失ってはいるだろうか。

近年、「不利益」という考え方が注目されている。不便であることが、かえって人に益をもたらす場合がある、という考え方だ。たとえば、紙の辞書を引くことを思い浮かべてほしい。目当ての語にたどり着くまでには、ページをめくる手間がかかる。しかし、その途中で、目当ての語の隣に並ぶ、思いがけない語に出会うことがある。電子辞書や検索は目的の語だけをまっすぐに差し出してくれるが、紙の辞書は、目的の外側にある世界を、偶然の形で見せてくれるのである。

山道を自分の足で歩く人は、車で頂上まで行く人が決して出会わない、道ばたの花や風の変化に出会う。かまどでご飯を炊く体験をした子どもは、炊飯器のボタンを押すだけでは知りようのない、火加減の難しさと炊きたての味を知る。②手間とは、単なる時間の浪費ではなく、その人だけの経験が生まれる場所なのだ。効率だけを求めるなら、手間は切り捨てるべきむだにすぎない。しかし、経験という尺度から見れば、手間は豊かさの源泉である。

誤解しないでほしいのだが、私は、便利なものを捨てて不便な生活に戻るべきだと言いたいのではない。地図アプリも自動翻訳も、私たちの生活を確かに支えている。急いでいるときに、わざわざ遠回りをする必要はない。問題なのは、便利さに慣れきって、③最短距離の外側に広がっているものの存在を忘れてしまうことである。

道は、目的地に着くためだけのものではない。歩くその過程で、私たちは町の表情を知り、季節を感じ、思いがけないものに出会う。それは検索結果のように誰にでも同じ形で与えられるものではなく、歩いた人だけのものになる。

だから、ときには地図アプリを閉じて、自分の感覚をたよりに歩いてみてはどうだろう。遠回りかもしれない。迷うかもしれない。けれども、その手間の中でしか出会えないものが、きつとある。便利さを使いこなしながら、あえて不便を選ぶ目を持つこと。それが、効率の時代を生きる私たちに求められている知恵なのだと思う。

(オリジナル創作)

(注) 尺度……物事を評価するときの基準。ものさし。源泉……物事が生まれてくるみなもと。

問1 ①「歩いたはずの道が、記憶の中に残っていない」とありますが、筆者はその理由をどのように考えていますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 歩く速度が速すぎて、まわりの様子を見る余裕がなかったから。

イ 矢印をなぞるように歩くだけで、自分の頭で道を選ぶことをしなかったから。

ウ 初めての町では目に入る情報が多すぎて、道順まで覚えられないから。

エ 地図アプリの表示が実際の道と食い違っていて、混乱してしまったから。

問2 本文中の「不利益」の具体例として適切なものを、次のア～カの中からすべて選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 紙の辞書を引き、目当ての語のまわりにある思いがけない語に出会う。

イ 自動翻訳を使って、外国語の文章の意味をすぐにつかむ。

ウ かまどでご飯を炊く体験をして、火加減の難しさと炊きたての味を知る。

エ 動画を倍速で再生して、短い時間で多くの情報を手に入れる。

オ 山道を自分の足で歩き、道ばたの花や風の変化に出会う。

カ 検索を使って、調べたいことを数秒で正確に知る。

問3 ②「手間とは、単なる時間の浪費ではなく、その人だけの経験が生まれる場所なのだ」とありますが、これはどういうことですか。次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、手間、経験の二つの言葉を使って、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

問4 ③「最短距離の外側に広がっているもの」とありますが、これはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 目的とは直接関係がないが、手間をかける過程でこそ出会える経験や発見。

イ 地図アプリには表示されない、目的地までより速く着ける近道。

ウ 便利な技術が生まれる前の、昔ながらの不便な生活様式。

エ 工地的地の周辺にある、多くの人にまだ知られていない場所。

問5 本文の構成や表現について述べた文として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア 冒頭で地図アプリという身近な例を挙げることで、読者が自分のこととして考えられるようにしている。

イ 「何かを失ってはいないだろうか」などの問いかけの文によって、読者に考えを促しながら論を進めている。

ウ 紙の辞書やかまどの例など、複数の具体例によって「不利益」の内容をわかりやすく示している。

エ 工便利な技術の問題点を列挙したうえで、最終段落では便利なものを捨てるべきだという主張を明確に述べている。

問6 本文に述べられている筆者の考えとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア 技術の進歩は人間から経験を奪うものなので、生活の中の便利な道具を少しずつ減らしていくべきである。

イ 便利さを活用しつつも、手間の中でしか得られない経験の価値を知り、ときには不便を自分で選ぶことが大切である。

ウ 紙の辞書や徒歩での移動は、電子機器を使う場合に比べて学習の効果が高いことが証明されている。

エ 迷ったり遠回りしたりする経験を積み、地図アプリがなくても目的地に着ける力が身につく。

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(――の左側やカッコ内は口語訳です。)(16点)

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。(流れてゆく川の流れは絶えることがなく、それでいて、もとの水と同じではない) よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。(よどみに浮かぶ水の泡は、一方で消えたかと思うと一方でできて、長くとどまっている例はない) 世の中にある人とすみかと、①またかくのごとし。(この世の中にある人と住まいとは、また、このようなものである)

たましきの都のうちに、棟を並べ、②薨を争へる、高き、卑しき、人のすみひは、世々を経て尽きせぬものなれど、(玉を敷いたように美しい都の中に、棟を並べ、屋根の高さを競っている、身分の高い人、低い人の住まいは、何代を経てもなくならないものであるが) これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。あるいは去年焼けて今年作れり。あるいは大家滅びて小家となる。(これは本当かと調べてみると、昔からあった家はまれである。あるものは去年焼けて今年作ったものである。あるものは大きな家が滅びて小さな家になっている)

住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかにひとりふたりなり。(住む人もこれと同じである。場所も変わらず、人も多いけれど、昔会った人は、二、三十人の中に、わずかにひとりかふたりである) 朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。(朝に死ぬ人がいれば、夕方に生まれる人がいるというこの世の定めは、まったく水の泡に似ていることだ)

③その、主とすみかと、無常を争ふさま、いはばあさがほの露に異ならず。(その、住む人と住まいとが、どちらが先に滅びるかを争うかのようなありさまは、言ってみれば朝顔とその花に置く露の関係と変わらない) あるいは露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。あるいは花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども夕べを待つことなし。(あるときは露が落ちて花が残る。残るといっても朝日を浴びて枯れてしまう。あるときは花がしぼんで露はまだ消えないでいる。消えないといっても夕方まで残ることはない)

(鴨長明『方丈記』による。仮名遣い等一部改めた。)

(注) うたかた……水面に浮かぶ泡。 たましきの……玉を敷きつめたように美しい。 薨(いらか)……屋根の瓦。 世々(よよ)……何代もの長い年月。 ためし……例。 無常……この世のすべてのものは、絶えず移り変わり、とどまることがないということ。

問1 ②「薨を争へる」の「争へる」を、現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書きなさい。(4点)

問2 ①「またかくのごとし」とありますが、筆者は「人とすみか」がどのようなのだと述べていますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 玉を敷きつめたような都の家々と同じように、はなやかで美しいということ。

イ 川の流れや水の泡と同じように、いつまでも絶えることなく続いていくということ。

ウ 川の流れや水の泡と同じように、絶えず入れ替わり続けて、もとのままではないということ。

エ 水の泡と同じように、人の住まいは水害によって失われやすいということ。

問3 本文で筆者は、人の世のありさまを川の流れや水の泡にたとえています。筆者の考えを次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、現代語で十字以上、二十字以内で書きなさい。(4点)

問4 次は、この文章を読んだあとのAさんと先生の会話です。空欄にあてはまる言葉として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

【会話】

Aさん「筆者は、③のように、人と住まいの関係を『あさがほの露』にたとえていますね。」

先生「そうです。露が落ちても花が残ることもあれば、花がしぼんでも露が残ることもある、と言っていますね。ただし、その後にくる部分まで読むことが大切ですよ。」

Aさん「なるほど。」 「ということを表しているのですね。」

ア どちらが先に消えるかという違いはあっても、花も露も長くはとどまれないように、人も住まいもいつかは失われる

イ 露はもろくてはかないが、花のように美しいものは、朝日を浴びても枯れずに残り続ける
ウ 人の住まいは、朝顔の花のように毎年新しく作り直していけば、いつまでも保ち続けることができる

エ 人よりも住まいのほうが長くこの世に残るのだから、立派な家を建てて住むことに意味がある

(以上で問題は終わりです。)